
ラグナのティンバー・マニアックス伝

中之譲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナのティンバー・マニアックス伝

【Nコード】

N7389Y

【作者名】

中之讓

【あらすじ】

エルオーネ奪還を目指すラグナの小話短編集

お金がない！from DOLLET（前書き）

おや、ラグナがドールに着いたようです。

お金がない！ from DOLLET

「おうおうおうおう！ やっとなつたぜ！」

・ ．．．えつと、ここはどこだっけ？ 地図地図地図ぢず．．．

古き大国の面影を残す小さな公国の貧弱な関門の前に、中世ヨーロッパの街並みとはあまりにも不釣り合いの男が現れた。ラフな茶色のジーンズにはだけた青いジャケットは180以上もあるうかという体格にはさまになっていたが、異様に長い髪が左右に流れているのを見るとやはり28歳という若さを感じさせる。しかしその青い瞳、きりつとした眉、高い鼻、大きな口？ は整っているため、一つの人物としての魅力を構成していた。

いい大人だというのに、もう紙切れと向き合って20分近くであった。回してみたり、首を傾けてみたり、はたまた仰向けになつてみたり、なにかと忙しい男である。国境でそんなことをしている大人が税関の者の目に留まらないはずがない。

．えつと、あそこの橋を渡って、湖を南に見てずつと東に進んできたから．．．

地図に夢中のその男が知らず知らずにパトカーに腰をかけた時、遂に彼は屈強そうな警備員に両脇を抱えられて事務室へと引きずられていった。

やはり彼もしつこい調査を受けるのだろう。何せこのご時世である、拘束は免れても国内への侵入は許されないのではないだろうか。しかし彼は非常に不用心な男である。現在は主に2つの大国が世界

を牛耳っており、2つの大陸をそれぞれその手に握っているようなものである。

一つは魔女の国エスタ。突如として邪悪な魔女が現れ兵力を用いて女の子狩りをしており、国境を越えてまで世界中の女の子を誘拐する事件が多々勃発している。魔女の後継者探しとの名目のようだが真意は分からず、どちらにせよ世界を震撼させていることは間違いない。

そしてもう一つの大陸を支配するガルバディア。近年ファシズム主義の新たな大統領が就任してからと言うもの、領土拡大を図り大陸内の独立国家を侵略していった。昨年も一国を領土にしていたり、国税を湯水のごとく使用し反政府主義者を投獄する監獄まで建設し、徹底して弾圧を繰り返り広げるために他国からファシズム主義として認知されるようになった。それはここ、ドール公国も例外ではない。

現在ガルバディア大陸の片隅に追いやられたドール公国は、嘗て神聖ドール帝国としてこの大陸に文化を築いて来た最も歴史の長い国家である。その歴史の長さはエスタと比肩する。しかし長い歴史の中で現在のガルバディアの侵攻を受け、山脈と海に囲まれた小さな地域に追い込まれているのだ。ゆえに外部からの人の侵入には非常にナイーブであり、現在は指先一つで転覆してしまうほどに小さな国家なのだ。

がしかし、先ほどの男は5分も立たないうちに事務所から出てきた。それも屈託ない笑みを警備員とかわしながら・・・。

「では、ごゆっくりどうぞ。お勧めは中央広場ですからね、ラグナさん」

「あいよっ！あんがとな」

ラグナと呼ばれた先ほどの男は警備員のお辞儀で丁寧に見送られながら、中年のおっさんのような振る舞いで意気揚々と小さな凱旋門をくぐっていった。

- へへへ、我が親友たちよ！旅の特権を許してくれな、なんてたつて観光地を巡る以上の観光はないからよお！

狭い場所に均等に揃った建物の間をを縫うように石畳が走る景色は、フリージャーナリストとして活動してきた経験においてもどこの街にも当てはまることはなく、とても独特であった。

- 情報を仕入れるにはパブに行け！それはどのRPGでもお約束だよなあ。

- なにか面白え話でもありやいいんだけどよお。

- ま、そんな仕事の固い話は後だ！とにかく飯を兼ねて俺はパブに行くぞ！

ラグナは停泊する漁船を眺めながら独り合点をする、パブへと向かった。がしかし、数歩を進めると直ちに立ち止まりモジモジゴソゴソと体中を弄り始めた。

「ん？までよ？」

内ポケット、ジャケットの襟の中……。それは靴の中敷きの下まで及んだ。そして何かを悟ったかのように動きを止めると、血相を変えて一言！

「お金がなあ~~~~い！それにパブはどこだ~~~~!?」

別に誰かに助けを求めるわけでもなく、注目を浴びようとしているわけでもなく、彼は単純に狼狽していた。

- しまった！列車賃を差し引いて計算してなかったぜ……。あ、キロス君、ウォード君、助けてくれえ！

そんなとき、萎びた彼のもとへ口元を吊り上げたあからさまに怪しい男が手を差し伸べるのであった。

~~~~~

「いやあ、助かったぜえおっさん！」

「まあ遠慮なく飲みなさい」

ラグナをパブへと導いたのは、まさしくパブのオーナーであった。彼はまるで予定調和であるかのようにさっと現れ、自らがオーナーであることを明かし案内したのである。ラグナより少し歳があるように見える彼は、そのまとまった振る舞いが見た目よりも老いたように感じさせた。

「いやあ、銀行まで連れて行ってくれたあ、一石二鳥だな。でもよおっさん、なんで俺が地元の間人間じゃないって分かったんだ？」

「いやいや、お金がなくちゃ不憫でしょお兄さん。（それに検閲の前で騒ぐ人は外者と丸分かりだ）」

パブは中央広場への通路にあり人が盛んに往来するため、地元では人気であった。景観にマッチさせるためか装飾は大人しく、ひよこりと吊られている看板も石造りの建物には映えていなかったのだが、磨り硝子を通してこぼれる暖かい灯りやお客の賑う声がそのパブの魅力象徴しているため、自然と人が集まるのであった。

小洒落たカウンターで額を寄せながら、ラグナは空腹を満たしていく。フランスパンにスープに寿司、彼は時折体を起して身ぶり手ぶりの談笑をしながら全て食べ終えた。どうやら彼の頭の中は常に新しいことで更新されていくようで、過去の憂慮や事象はたとえそ

れが重要なことでも薄れてしまつらしい。事実、実際に銀行から引き出せたギルがあまりにも少ないことなど毛頭考えていないようだ。ラグナが満足げにお腹を叩くと、今まで彼に相槌を打ちながら静かに見守つてきたオーナーが口達者になつた。

「こちらは本場、乾燥地帯のウエスタカクタスですよ」

「おお、ガルバディアあつたらウエスタンカクカクっていうもんな」

「（西部のカクカク？）ラグナさん、お味はいかがでしょうか？」

「お、おおおお！いいぜいいぜ！」

・メモメモ・・・寒天状の果肉、とても甘いデザート、ウエスタンカクカク。っと

熱心にスプーンとペンを交互に使いながらノートと向き合うラグナを不思議に思つてか、オーナーは訊ねた。

「喜んでいただけてなによりです。それより、何をやってなさるのですか？」

ラグナはそのポイントを問われたことが嬉しいのか、バン！とカウンターを叩いて立ち上がると、ここ一番の雄弁を奮つた。

「おうおう！俺はなあ、”ふりーじゃーなりすと”なんだ。こつやつて世界中のことを記事にして生活しているつてわけよあ」

「それはそれは素晴らしい！では是非このお酒も飲んでいただきたい」

オーナーは特殊な職業の男に感銘を受けたのか、パンと手をたたくと椅子に乗つかつて奥の棚をいじり始めた。背伸びをする度に木製の三脚椅子が危なっかしくガタガタと揺れる。

「おっさん、気をつけるよー」

その心配もないようで、オーナーは器用に棚の一番上から五月人形ほどの箱を下ろすと、中からいわゆる”とつておき”のお酒を取り



だした。ウイスキー型の酒瓶のなかで不気味な黒色の液体が揺れる。

「おっさん、なんだこりゃ？」

オーナーがコルクを取ると、ぷんとした例えようのない悪臭が鼻を突く。オーナーはグラスにそれを半分ほど注ぐと、冷やしておいたポーシヨンで割った。

「これはですね、ヘッジヴァイパーの焼酎ですよ」

「へ、ヘッジヴァイパー!？」

きつとオーナー、そして周囲のテーブル客の脳裏には背筋をゾクゾクさせるイメージが沸いているに違いないしかしラグナはいまいちピンと来なかつたらしい。

「なんだ、なんのハイパーだ？エンジンは2000ccくらいか？」

相変わらずの無知っぷりにパブはどつと沸いた。よくこれで軍人をやっけていられたものである……。しかしそんなところへ彼の足もとから声が上がった。

「ヘッジヴァイパーは毒蛇だよ、おじちゃん知らないの？」

唐突で無邪気な女の子の登場にラグナは戸惑ったが、彼は思考より先に体が動くタイプであるが故に女の子を取り上げると膝の上に乗せた。

「お、おう……」

・酒場に子供がいていいのかよ、おい

そんな彼の疑問を察知してか、オーナーはすぐさま口を開いた。

「この子は画家の娘だよ」

「お！そうだったのかあ！お嬢ちゃんは年いくつだい？」

「むっつ」

健気に微笑む彼女に、思わずラグナもほころんだ。

「ラグナさんもいるのかい？子供」

「ああ。まあ」

「何かと大変だろう、世界を回っていると・・・」

・エル・・・。

・そうだった、俺はエルを取り戻す旅に出かけていたんだった。

・あいつは俺の助けを待っているだろうな。いや、俺しか助けられる人がいないんだ。

・レイン、いつも迷惑かけて悪いなあ。でもまあ、俺にはこのやり方しかできないんだぜ。

・エル、おまえもこの子のような屈託ねえ笑顔をまた見せてくれよな・・・。

「この娘は私よりカードが強いですよ！それはまあ見事です。まあ私は誰に対しても勝った覚えがないのですけどねえ。ハハハ・・・」

「すごいなあお嬢ちゃん」

「うん！」

ヘッジヴァイパーの焼酎がまわったこともあり、オーナーとラグナの話はどんどん進んでいった。そして、ラグナがカードギャンブルでオーナーを未だ嘗てないほどボロ儲けさせ、記憶に残さなかったことはドールパプでの伝説である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7389y/>

---

ラグナのティンバー・マニアックス伝

2011年11月22日23時54分発行